



ある視点からの SS 研専の歴史

A View of IEICE SS Technical Committee History

緒方和博

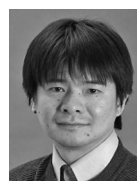
初代委員長は北陸先端大の学長等を歴任された片山卓也(敬称略)だった。国内にとどまらず国際的に知名度のあるソフトウェアにおける第一人者だ。ソフトウェア工学(SE)における最も権威のある国際会議 International Conference on Software Engineering (ICSE) が1998年に京都で開催された際には Technical Chair を務めた。現委員長が第16代なのでソフトウェアサイエンス(SS)研専が始まったのは約30年前である。片山によると、情報処理学会(情処)のSE研は既に発足していたが、ソフトウェアの原理を研究の対象とする研専を立ち上げたいということで始めたとのことだ。思いがサイエンスに込められていると認識している。

この原稿執筆の要求(ソフトウェア工学における最重要課題の一つ)に、対象とする研究が人類の生活に与えた影響についても触れることとあった。ソフトウェアということであれば、筆者が語るまでもなく、ソフトウェアがなくては人類の生活は成り立たないところまで来ていることは周知の事実である。SS研で発表された研究成果であれば、人類の生活にどのような影響を与えたのかを語ることは筆者には荷が重い。そこで、初代委員長が名前に込めた思いに関係することについて語ることにする。

ソフトウェアを包含する学問分野は Computer Science (CS) である。Wikipedia によると、Theoretical CS (TCS) と Applied CS (ACS) に分類されている。TCS は、権威あるジャーナル名にも使われており、少なくとも CS の研究者の間では市民権を得ている。Association for Computing Machinery (ACM) (チューリング賞を出している学会) に Applied Computing という研究会があることは知っているが、筆者は ACS という用語にはなじみがない。TCS は、計算の原理・理論

等を扱う。オートマトン、アルゴリズム、プログラミング言語の基礎、書換え等、である。SS研では、これらに関する研究発表は頻繁にある。それではなぜ研究会の名前を TCS にしなかったのだろう。本当の理由は筆者には分からないが、計算の原理・理論等はソフトウェアの原理と密接な関係はあっても同じではないということも理由の一つであろう。要求や保守等は TCS の対象ではない。ではなぜ、ソフトウェアの原理にしなかったのだろう。筆者の想像の域を超えることはないが、理論と実践をバランス良く扱いたいという思いがあったのではなかろうか。SS研では、明らかに SE に分類できる研究発表も数多くある。なぜ、情処 SE 研ではなく SS 研で発表するのかは興味がある。恐らく、理論と実践をバランス良く扱いたいという思想を堅持できているのであろう。真に新しいことを成し遂げるには、先人たちの築いた知見等を尊重しつつも、それらにとらわれることなく自由な発想をすること、自由に議論をすることが必要である。SS研はそのような場である。何がソフトウェアの原理であるのかはまだよく分かっていないというのが筆者の認識である。分かっているとすればより良いソフトウェアの開発方法を人類は手にしているはずだからである。まだ見ぬ場所にたどり着くにはいろいろなことをいろいろな方法で試す必要がある。SE の研究であろうが、TCS の研究であろうが、ソフトウェアの本質を捉えることのできる可能性のある発表が数多くあるのは初代委員長の思いを受け継いでいると言える。

(平成29年4月28日受付 平成29年6月6日最終受付)



緒方 和博 (正員)

平元慶大・理工・電気卒。平7同大学院博士課程了。同年北陸先端大・助手、形式手法等の研究に従事。現在、同大学院教授、博士(工学)。

緒方和博 正員 北陸先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科情報科学系
E-mail ogata@jaist.ac.jp
Kazuhiro OGATA, Member (School of Information Science, Japan Advanced Institute of Science and Technology, Nomi-shi, 923-1292 Japan).
電子情報通信学会誌 Vol.100 No.10 p.1048 2017年10月
©電子情報通信学会 2017